

令和5年度 長崎市立形上小学校 学力向上プラン

日本国憲法・教育基本法
学習指導要領
長崎県教育振興基本計画
長崎市第4次総合計画
長崎市教育振興基本計画

学校教育目標

考え判断し自ら行動する、やさしく
かしこく たくましい 形上っ子の育成

○地域の特色・地域の願い
○児童の実態や願い
○保護者の期待・願い

めざす児童像

<教師の指導力向上>
○学習指導要領が求める授業実践
○児童の課題に応じた授業改善
○きめ細かな児童理解と指導

○考える子 ○がんばる子
○たくましい子 ○磨き合い優しい子

<本校の重点課題>
○学力向上の実現
○特別支援教育の充実
○自信と実践力を備えた児童育成

学力向上の重点目標

★児童の実態（学習に向かう姿勢・学力調査の結果）をもとに、基礎基本の力の向上と主体的な学びの習得を目指す。
★授業改善やチャレンジタイム活用等の取組により、学力調査の平均点に近づける。各種学力調査における各教科については平均を3ポイント以上向上させる。

学力向上の指導の重点

①教科問わず「書く」活動の設定 ②「読解力」の育成 ③チャレンジタイムと家庭学習の連動と複数指導体制での指導
④学級版「学力向上プラン」を作成し、個別支援の充実 ⑤ICT・Chromebook の日々の活用

授業改善

- * 「めあて」と「まとめ」が子どもに届く**問題解決的な指導過程を踏えた授業展開**を行う。
- * ねらいに即した**「書く活動」**を授業の中に取り入れる。
- * **「読解力」**の育成を図る。
 - ・読み取りの技能を指導する。
 - ・叙述に即して読み取らせ、発言にも根拠をもたせる。
 - ・文章だけでなく表、グラフ図からも読み取らせる。
 - 単元末テスト平均 85点以上
- * **「主体的・対話的で深い学び」**の実現に向けて
 - ・追究する課題の設定
 - ・課題解決への見通しの理解
 - ・相手に分かりやすく伝えることを目的とした対話活動の実施（広げる・深める）
- * 支援を要する児童への**個別指導**
→ 学びの定着・主体的な学び

チャレンジタイムの充実

- 全学年において複数体制で指導する（実施率 100%）
- 週2回の実施
→ 家庭学習と連動した問題の提示

学力調査の結果及び平素の児童の実態

	国 語	算 数
1年	・拗音、促音、撥音などの基本的な文字の記述と文章を読み取る力が課題。	・文章問題が苦手で、問題の意味を理解できない子が多い。引き算の問題が苦手である。
2年	・発表の内容を聞き取り、聞き取った情報について答える問題が課題。	・長さの単位について、量をとらえて単位の大きさを考え、計算をすることが課題。
3年	・読解力に大きな課題がある。書くことに慣れておらず、条件作文が課題。二極化が著しい。	・「測定」領域が課題。多方面から考える力や意欲が低く、複雑な文章問題が苦手。
4年	・漢字の書き取り、話の聞き取りに課題が見られ、基本的技能の定着を図る必要がある。	・「数と計算」領域に課題が見られる。基礎基本を中心に指導を続けていく必要がある。
5年	・「読む」領域は、県の正答率平均を上回り、十分な力をつけている。「話す・聞く」領域に課題が見られる。	・「変化と関係」領域では県の平均を上回ったが、「データ活用」と「図形」の領域に課題が見られる。
6年	・「話す・聞く」「書く」領域において特に課題が見られる。複雑な設問の意味を理解する読解力を身に付ける必要がある。無回答率は0%で書くことを嫌わしく思う児童は少ない。	・「図形」「変化と関係」「データの活用」領域において特に課題が見られる。割合を求める問題に苦手意識がある。基本的な図形の公式を定着させる必要がある。

■学級担任によってより詳細な分析を踏まえて作成した学級別の「学力向上プラン」に基づいて取組を実践し、課題の領域（観点）について、+3ポイント以上の上積みを図る。
■アンケート「分かりやすい授業である」（90%以上）
「家庭での学習習慣が身に付いている」（85%以上）を目指す

学力向上プランの活用

- 各種学力調査の結果を踏まえた学級ごとの「学力向上プラン」を作成し実践する。
- 学期ごとに見直し修正する。
→ 授業参観・面談で進捗状況を確認する。
- 校内研修の研究への取組**
- 主体的に学びに向かう子どもの育成
→ ICT を活用した学習指導
→ Qubena を活用した自主学習の奨励
- 生活習慣の形成・家庭学習の充実**
- 生活リズムのある規律正しい生活習慣の形成
→ 家庭学習の手引きの作成（家庭への要請）
「あはは運動」の奨励
- 学習内容の定着を図る工夫
Qubena の活用（教科ごとの目標 100問/週、正答率 80%以上を目標に設定する）
- その他**
- * 週2回の「読書タイム」
- * スクールサポーターの活用

「P→D→C→A」サイクルを生かした方策の改善と目標の実現